

<研究資料>

台湾のセラピューティック・レクリエーションに関する研究の傾向

徐 玉珠¹

Trend of studies in therapeutic recreation in Taiwan

Jyo Gyoku Ju¹

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the movement and content of the studies on Therapeutic Recreation (TR) in Taiwan. This paper intends to provide a reference to the further TR studies in Taiwan and in Japan.

This paper surveys the relating materials published by Taiwan or Taiwanese researchers in international journals, conferences, and seminars between 1983 and 2007 as the reference to the analysis of the TR trend in Taiwan.

The result shows that TR in Taiwan experienced a dramatic increase in both the quantity and quality of TR researches starting from 2000. These researches incorporate multidisciplinary topics into the TR studies, such as physical education, leisure, sport psychology, counseling, as well as tourism industry. These studies are not only directed by multiple numbers of researchers, including graduate students, they also encompass international prospective while taking the specific consideration of the domestic needs, giving the TR in Taiwan its own unique characteristic and trend.

Furthermore, although there are accumulated many valuable theoretical researches and applications in the relevant TR studies, for TR to take root in Taiwan with implementation and continuity to develop, more actions must be taken, such as training of TR professionals, learning and the establishment of TR professional associations and certification system, publishing of professional journals, expanding the TR training abroad, and creating internship opportunities.

1. 緒言

セラピューティック・レクリエーション（以下 TR）という、半世紀ほどの歴史しか持たない新しい学術は、アメリカで学術理論と実践研究が盛んになるにつれて、各地の医療機関、コミュニティ機関、学校でのカウンセリングなど幅広く運用されるようになった。すでにあらゆる問題を抱えたあらゆる年齢層（児童、青少年、成人、高齢者など）において大きな効果を挙げており、アメリカ社会に受け入れられている⁸⁾。

一方アジアでは、観念の上でアメリカの影響を大きく受けている台湾でも、TR という専門学科への関心が高まりつつあり、ここ数年レジャースポーツ、レジャー観光産業などの領域で、TR に関する研究論文が数編発表されている。しかし理論、応用実践の系統研究共にまだそれほど深い探究には至っていない。

したがって、本文は台湾の TR に関する研究の傾向と実践研究の成果の内容分析を通じて、学術界において台湾の TR 研究への理解の増進を期待

1 台湾国立屏東教育大学体育学系

するものである。また同じアジア圏に位置する日本も、TRについてはアメリカの影響を大きく受け、今まさに発展し始めた時期であり、そして独自の発展を目指している点なども台湾とほぼ同じような状況にある。よって、国際性という観点から台湾のTR研究が明らかになれば、日本のTRの発展にとっても参考に値するであろう。

本研究は、以上の趣旨に沿い、各国の研究者が台湾で、あるいは台湾の研究者が国内外で発表し、雑誌等に掲載した文献、またシンポジウムなどで発表されたTR関連の論文や文献を対象にし、量と質についての分析も同時に行いながら、台湾のTRに関する研究の傾向と重要な成果の内容を明らかにするものである。また将来の課題、発展の方向を見出し、今後の台湾と日本のTR研究の発展に対して参考資料の提供を試みるものである。

2. 研究方法

各国の研究者が台湾で、あるいは台湾の研究者が国内外で発表し、雑誌等に掲載された文献、シンポジウムなどで発表されたTR関連の論文や文献を収集し、整理分析を行うと同時に量と質の分析も行い、さらに台湾のTR研究の特徴、成果を理解する。

(1) 研究対象

分析の対象となるTR関連の論文や文献の数は、修士博士論文やシンポジウム発表の論文、雑誌等に掲載されている論文等合計44件である。これらは、筆者が2005年3月から2007年9月までの間にインターネット、台湾の国家図書館、また各シンポジウムの主催単位、大学、大学院、大学の図書館および論文発表者ご本人のご協力によって入手した全ての文献である。

(2) 分析の方法と原則

1) 量の分析

- ①収集したTR関連の論文や文献を整理し計算する。収集した文献を発表年代順に整理し、発表者、所属領域をまとめた一覧表を作成した。
- ②収集TR関連の論文や文献を年代別に計算し数量化する。
- ③更に、収集したTR関連の論文や文献の翻訳表現用語、文献類別、研究形態、研究者

の所属領域、所属国を分類して計算し、数量化する。

2) 質の分析

- ①実践研究の資料の種類、完成場所を分類する。
- ②実践研究の研究対象、研究方法と活動、結論内容の重点を整理して一覧表を作り、更に研究テーマ、研究方法、研究対象、活動、結論内容に対して質の分析を行う。

3. 結果と考察

(1) 台湾セラピューティック・レクリエーション研究の状況と特色（量的分析）

表1に示す計44件の台湾セラピューティック・レクリエーション(Therapeutic Recreation, TR)関連の論文や文献は、その殆どがアメリカの文献を研究対象としている^{註1)}。これらのTR関連の論文は、アメリカのTRの歴史、定義、目的、価値あるいは活動、実行過程、各種モデルケース、専門家の養成、資格制度化など概念、原理、思想と関連する応用の論述を考察したものである。台湾でTRへの関心が高まった主な原因のひとつには、アメリカのTRという学科が台湾でも次第に注目され、TR啓発の活動が盛んになった事があげられる。そして台湾の人にTRという専門学科の重要な基礎教育を理解させるという目的がある。

表1から、台湾初のTR関連の文献は1983年に発表されたことがわかる。これはアメリカの論文「休閒治療師—専門人員の新領域 (Your professional: The recreational therapist)」(表1-NO.1)が中国語に翻訳され発表されたものだが、これが正式に台湾のTR関連の研究の幕開けをもたらした。続いてTR研究の全体的な推移を見ると、まず年代別には図1のように、1980年代にわずか2篇4.6%だったが、1990年代には3篇、6.8%を占め、2000年以降大幅に増加して2007年までに計39篇、全体の9割近く(88.6%)を占めている。次に年度別の研究論文の数量分布を見ると、最高は2007年(13篇)、次いで2004年と2005年(各7篇)、そして2003年(5篇)と続いている(表2)。また、「セラピューティック・レクリエーション導論 (Therapeutic

表1 台湾セラピューティック・レクリエーション文献発表の年代、発表者、所属領域一覧表

篇 NO.	論 文 名	発表年次	発 表 者	所 属 領 域
NO. 1	休閒治療師—專業人員的新領域 (TR療養師—専門人材の新領域)	1983	Ann, Patricia Shank, J. W 陳盈芋譯	特殊教育
NO. 2	休閒治療 (TR)	1989	羅佳	心理、カウンセリング
NO. 3	休閒治療—休閒活動的醫療及心理輔導效能之探討 (TR活動の医療及び心理指導への効果について)	1995	沐桂新	心理、カウンセリング
NO. 4	災後復健、台湾需要休閒治療 (災害後のリハビリと、台湾に必要なとされるTR)	1999	姜義村	体育、レジャースポーツ
NO. 5	美國休閒治療與動物補助療法 (アメリカにおけるTRとアニマルセラピー療法)	1999	姜義村	体育、レジャースポーツ
NO. 6	突破障礙的休閒治療 (障害を乗り越えるTR)	2000	李明榮	レジャー事業管理
NO. 7	休閒治療在特殊教育上之應用 (TRの特殊教育への応用)	2001	陳理哲	体育、レジャースポーツ
NO. 8	國人對休閒治療消費意願之研究 (台湾人のTRへの消費意欲の研究)	2002	曾湘權	観光事業
NO. 9	休閒治療的現況與展望 (TRの現況と展望)	2002	杜淑芬	心理、カウンセリング
NO. 10	美國休閒治療之分析 (アメリカにおけるTRの分析)	2002	郭金芳	体育、レジャースポーツ
NO. 11	遊憩治療理論與應用之發展 (TRの理論と応用の発展)	2003	陳惠美、黃雅鈴	観光事業
NO. 12	以休閒遊憩為健康促進之方法 (TRによる健康促進の方法)	2003	姜義村	体育、レジャースポーツ
NO. 13	遊憩治療對憂鬱症治療效果之研究 (TRのうつ病治療への効果の研究)	2003	陳惠美、許正典	観光事業
NO. 14	以科技器材主導之身體活動的治療式遊憩對自閉症青少年的社交層面的影響 (TR療法の科学器材による身体活動の、自閉症青少年の社交性に対する影響)	2003	姜義村	体育、レジャースポーツ
NO. 15	休閒治療對青少年自我效能及休閒認知之研究 (青少年の自我とレジャー認知に対するTRの研究)	2003	林春鳳	体育、レジャースポーツ
NO. 16	休閒活動與休閒治療 (レジャー活動とTR)	2004	楊峰州	体育、レジャースポーツ
NO. 17	休閒治療理論與應用 (TRの理論と応用)	2004	趙珮怡	体育、レジャースポーツ
NO. 18	休閒治療對癌末病患生活品質影響之研究 (末期がん患者の生活品質に対するTRの影響について)	2004	黃翠瑛、林士彦、李俊彦、張錦秀、王英傑、許禮安	バイオ事業管理
NO. 19	美國休閒治療發展之研究 (アメリカにおけるTRの発展の研究)	2004	劉秣榛	体育、レジャースポーツ
NO. 20	寓教於樂的治療式遊憩 (楽しく教えるTR)	2004	姜義村	体育、レジャースポーツ
NO. 21	休閒治療學科在台灣發展的可能性 (TR学科の台湾における発展の可能性)	2004	Carla. E. S. Tabourne	体育、レジャースポーツ
NO. 22	休閒服務品質與休閒治療 (レジャーサービスの品質とTR)	2004	Carla. E. S. Tabourne	体育、レジャースポーツ
NO. 23	休閒治療應用之分析 (TR応用の分析)	2005	劉秣榛、鄭肇家	体育、レジャースポーツ
NO. 24	治療式遊憩介入於老年人平衡力之效益 (高齢者の平衡感覚に対するTRの有効性)	2005	朱維聖	体育、レジャースポーツ
NO. 25	休閒治療與物理治療對下背痛療效之研究 (腰痛に対するTRと物理治療の効果の研究)	2005	吳文瑞	企業管理、管理学

表1：続き

N0.26	醫療人員對休閒治療的認知與態度之研究 (医療人員のTRに対する認知度と態度の研究)	2005	李翊豪	レジャー事業管理
N0.27	休閒治療概述 (TR 概述)	2005	謝旻諺、李健美、唐國峰	体育、レジャースポーツ
N0.28	淺論遊憩治療對精神分裂症患者之應用 (TRの精神分裂症治療への応用)	2005	羅玉霖	作業療法
N0.29	治療式遊憩與適應體育在臺灣之未來合作 發展方向 (台湾におけるTRと体育の融合 と発展の方向)	2005	姜義村	体育、レジャースポーツ
N0.30	休閒治療之發展與未來展望 (TRの發展と 未來への展望)	2006	陳文泰	体育、レジャースポーツ
N0.31	休閒治療於健身俱樂部之應用 (TRのスポ ーツジムへの応用)	2006	陳文泰、呂明秀	体育、レジャースポーツ
N0.32	治療式遊憩在高齡期健康促進教育上的應 用探討 (高齡者への健康促進教育に対す るTRの応用について)	2007	徐玉珠	体育、レジャースポーツ
N0.33	台灣休閒治療的發展與遠景 (TRの發展と 遠景)	2007	林春鳳	体育、レジャースポーツ
N0.34	台灣高齡者治療式遊憩方案之開發 (台湾 の高齡者に対するTRの方法の開發)	2007	徐玉珠	体育、レジャースポーツ
N0.35	當前運動與遊憩治療議題 (ウォーミング アップとTR)	2007	Carla E. S. Tabourne	体育、レジャースポーツ
N0.36	老年照護與遊憩治療在美國 (アメリカに おける高齡者介護とTR)	2007	John Price	医療リハビリ
N0.37	美國休閒治療實務-以醫院治療服務為例 (アメリカにおけるTRの実務-病院治療 サービスを例として)	2007	John Price	医療リハビリ
N0.38	日本治療式遊憩的現狀 (理論篇) (日本に おけるTRの現況理論篇)	2007	Murray Hiroko	福祉学
N0.39	日本治療式遊憩的現狀 (實務篇) (日本に おけるTRの現況実務篇)	2007	Murray Hiroko	福祉学
N0.40	韓國的休閒治療 (韓國のTR)	2007	Heewon Yang	体育、レジャースポーツ
N0.41	韓國老年人的休閒治療 (韓国における高 齡者のTR)	2007	Heewon Yang	体育、レジャースポーツ
N0.42	台灣休閒治療教育結構的初探 (台湾にお けるTR教育の構成について)	2007	廖宜賢	体育、レジャースポーツ
N0.43	休閒遊憩治療 (TR)	2007	林旭龍	観光、旅遊健康
N0.44	治療式遊憩導論 (TR導論)	2007	David R.Austin; Michiel E.Crawford 陳俊忠等譯	体育、レジャースポーツ

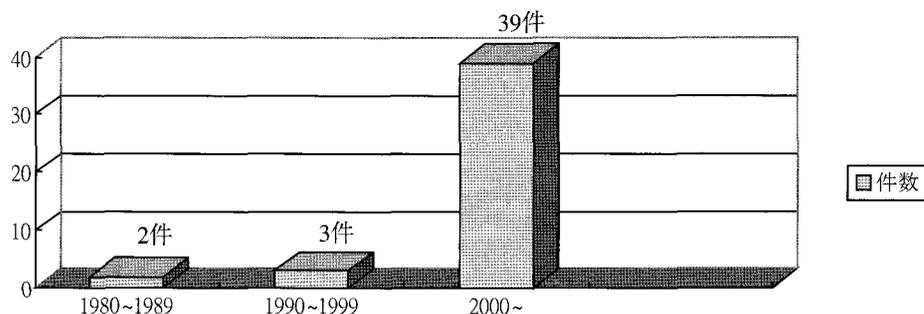


図1 文献数の年代別推移

表2 年代別論文の分布表

年度	1983~1989	1995~1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
件数	2	3	1	1	3	5	7	7	2	13	44

Recreation An introduction, Third Edition)」（表1-NO.44）はTR 関する初の中国語訳の書籍（2007）である。

これらの表から、台湾 TR 研究は1980年代前半にアメリカの学術影響を受けて始まったと言える。しかも明らかに2000年以降になってやっと研究が盛んになってきている。台湾 TR 研究がそのように急激に大幅な成長をみせた大きな原因は、台湾政府が1990年代末に導入し始めた週5日制（いわゆる週休2日制）である。これにより台湾の人々の休息時間が増加し、レジャー活動の品質の重視、健康意識の高まりが促進され、また社会もそれを徐々に受け入れたのである。加えて、台湾運動レジャー関係の学部学科が急激に増えたことも要因のひとつといえる。1995年から2007年までのたった12年間で、全国約100余りもの大学が次々とレジャー関係の学科、大学院を創設している^{6) 10)}。

以上44篇の論文で使われている「セラピューティック・レクリエーション」という名称の中国語訳には主に「遊憩治療」、「休閒治療」、「治療式遊憩」、「休閒遊憩」、「休閒遊憩治療」の5種類がある（表3）。その中でも「休閒治療」という翻訳表現は最も多く計28篇、63.6%を占め、次いで「治療式遊憩」（計9篇、20.4%）、第三位は「遊憩治療」（計5篇、11.4%）である。このように多岐にわたる翻訳表現に関し、日本を例にあげると、鈴木秀雄¹⁾は「セラピューティック・

レクリエーション」と訳するのが本来の意味を最も忠実に表すことができるとしている。しかし茅野宏明²⁾は、研究者の間でまだ「セラピューティック・レクリエーション」についての基本的考案が不十分であるため、名称に統一性はないとしている。一方台湾でも統一された名称はまだなく、林旭龍⁵⁾は、「セラピューティック・レクリエーション」実施の過程が治療行為、レジャー教育、娯楽・休息の方式とその活動の選択、といった要素を含むため、「休閒遊憩治療」という訳がその理念と精神にふさわしいとしている。また、姜義村⁷⁾は「休閒治療」と訳した場合、「治療式遊憩」の中の治療段階（Treatment）の意味にとどまり、「治療式遊憩」という名称を使うことによって、初めてレジャー式治療、レジャー教育とサービス参加の3段階のすべてを含む意味を持つことができる、と述べている^{8) 2)}。

続いて、TR 研究の文献を分類すると、表4で示すように理論的論述及び実践研究の2種類に大別できる^{8) 3)}。そのうち理論的論述は計36篇、81.8%と最も多く、次いで実践研究は計8篇、18.2%である。2002年（NO.8）発表の「國人對休閒治療消費意願之研究」は台湾 TR 実践研究の第1号である。加えて研究形態を見ると、学識者（大学院生を含む）による単独研究が最も多く計32篇、74.8%を占め、次いで複数の学識者（大学院生を含む）による共同研究が計4篇、9.1%、第3位は実務者の単独研究と翻訳でそれぞれ3篇、6.9%を占めている（表5）。

研究者の所属領域を分類すると、表6に示したように（1）体育、レジャースポーツ（2）特殊

表3 翻訳表現用語

	翻訳用語	文献数	%
1	休閒治療	28	63.6
2	治療式遊憩	9	20.4
3	遊憩治療	5	11.4
4	休閒遊憩	1	2.3
5	休閒遊憩治療	1	2.3
	合計	44	100.0

表4 文献類別

	文献類別	文献数	%
1	理論的論述	36	81.8
2	実践研究	8	18.2
	合計	44	100.0

表5 研究形態

	研究形態	文献数	%
1	学識者(大学院生含む)単独研究	32	74.8
2	実務者の単独研究	3	6.9
3	学識者(大学院生を含む)共同研究	4	9.1
4	学識者と実務者の共同研究	1	2.3
5	翻訳	3	6.9
	合計	44	100.0

表6 研究者所属領域

	領域	文献数	%
1	体育、レジャースポーツ	27	61.0
2	特殊教育	1	2.3
3	心理、カウンセリング	3	6.9
4	観光事業	4	9.1
5	バイオ事業管理	1	2.3
6	企業管理、管理学	1	2.3
7	レジャー事業管理	2	4.6
8	作業療法	1	2.3
9	福祉学	2	4.6
10	医療リハビリ	2	4.6
	合計	44	100.0

教育(3)心理、カウンセリング(4)観光事業(5)バイオ事業管理(6)企業管理、管理学(7)レジャー事業管理(8)作業療法(9)福祉学(10)医療リハビリの10種類の専門領域に分けられる。その内訳は体育、レジャースポーツ専門領域の専門家が最も多く(計27篇、61.0%)、次いで観光事業専門領域の専門家(計4篇、9.1%)、心理、カウンセリング専門領域の専門家(計3篇、6.9%)となっている。最も早くこの研究に注目したのは特殊教育と心理、カウンセリング専門領域の専門家で、初期にTRを特殊教育の方面で運用しようと考え、レジャーを通じたカウンセリングによって学習障害ある学生の学習能力を高めようとする研究がなされた^{31) 9)}。その後は体育、レジャースポーツの専門家による研究が殆どで、スポーツやレジャーへの関心の高まりが影響していると考えられる。その他観光事業の専門家による研究は、ここ数年台湾政府が積極的に推進しているレジャー観光、健康旅行等との関連が考えられる。

次に文献発表者の所属国を見ると、台湾を主とする研究については、当然台湾の研究者が一番多

表7 所属国別

	国	人数	%	註
1	台湾	34	77.2	
2	アメリカ	8	18.2	3篇の翻訳文献を含む
3	韓国	1	2.3	
4	日本	1	2.3	
	合計	44	100.0	

く(計34篇、77.2%)、次いでアメリカが計8篇、18.2%を占めている(表7)。なぜアメリカ、日本、韓国の発表者が台湾のTRを研究したのか。それは台湾人の国際観を高め、国際学識者との交流の機会を増加させるため、台湾は2004年に初めて国際シンポジウムを開催し(2004)、アメリカの学識者を招して以来、2007年にはアメリカの他更に日本、韓国の学識者を招し、「2007高齢者セラピューティックレクリエーション国際シンポジウム」を開催した¹²⁾。もう1つの重要な原因は、ただひたすら欧米の認識、価値観だけを観察して模倣し、転用することにより、台湾の独自性を欠いたり、実践の過程で同じ失敗を繰り返したりするのを免れるためである。そこで発祥地のアメリカ以外に近隣の日本、韓国の経験も参考にし、その上で台湾独自の経験を踏まえて研究を進めようというのである。

以上のような文献分類、研究形態及び研究者の所属領域、所属国の量的分析を見ると、台湾TR研究は理論的論述が44篇中36篇(81.8%)と圧倒的に多いが、実践研究こそもっと重視、強化されるべきである。その研究の方向は多様な発展を呈し、体育、レジャースポーツと心理、カウンセリング、観光事業等様々な分野の観点からTRを探求している。また主として学識者(大学院生を含む)の主導的な研究の形態をとっており(38篇、86.2%)、同時に国際観(International)、国際視野を備え、しかも地域的な(Regional)経験構築の重要性に対する考慮が必要とされること、それが台湾のTRに関する研究の傾向と特色であるといえる。

(2) 台湾におけるセラピューティック・レクリエーションの実践研究の主な成果(質的研究)

分析の結果、実践研究に関する文献は8篇(19.1%)あったが、表8に示すとおり、台湾の

表8 セラピューティック・レクリエーション実践研究資料別、完成場所

NO.	種 類	発表場所
NO.8 曾湘樺	修士論文	台 湾
NO.13 陳惠美、許正典	個人研究	台 湾
NO.14 姜義村	博士論文	アメリカ
NO.15 林春鳳	博士論文	アメリカ
NO.18 黃翠瑛、林士彦	個人研究	台 湾
NO.24 朱維聖	修士論文	台 湾
NO.25 吳文瑞	修士論文	台 湾
NO.26 李翊豪	修士論文	台 湾

*上記資料のNO.は表1に対応している。

実践研究は修士、博士論文が多く、そのうち2篇がアメリカで発表された博士論文（NO.14、NO.15）、4篇が修士論文（NO.8、NO.24、NO.25、NO.26）、残る2篇が個人研究（NO.13、NO.18）である。台湾でのTRに関する実践研究は、主に大学院での研究であることが分かる。

次に、台湾のTRの実践研究に関する文献の内容について、(1)研究対象、(2)研究方法と活動、(3)結論の内容の三点を整理してみる(表9)。これにより実践研究の構成面の特徴を明らかに

し、その特徴について更に分析を進めることができる。

続いて、表9で整理した実践研究の構成面の特徴は、下記の五つの観点からその主要な成果を見出せる。

1) TRの実践研究のテーマ

現在台湾におけるTRの実践研究のテーマは次の2つに大別できる。①認知度、態度と治療参加への意志など、②効果、影響など1つ目の「認知度、態度と治療参加への意志」(NO.8、NO.26)

表9 セラピューティック・レクリエーション実践研究における研究対象、方法と活動、結論一覧表

NO.	項 目	内 容
NO.8 曾湘樺	研究対象	介護施設入居者の家族
	研究方法と活動	調査研究（アンケート、インタビュー等）、「セラピューティック・レクリエーション利用者要望調査表」を作成、少ないが現場の訪問もある。
	結論内容	介護施設の入居者はそれぞれ特性が異なるが、TRに対する認知にはそれほど差がなく、むしろ平均月収の差によってその差が大きくなる。そのほかセラピューティック・レクリエーションが普及していないために、殆どの人が音楽、ダンス、太極拳など12種のレジャー活動が主な治療活動だと思っている。 介護施設入居者はTRの認知度が高まるほどそれを肯定的に捉えている。そして家族も12種の活動を治療活動とみなす人ほど、その効果に肯定的である。 介護施設入居者の家族のTRへの認知度は、その治療を行う事への意向に影響する。すなわち認知、関心度と治療の意志は相関関係にあり、認知度が高いほど関心も高くなり、また治療に参加する意向も強くなる。
NO.26 李翊豪	研究対象	医療関係者
	研究方法と活動	調査研究（アンケート、インタビュー等）、「医療関係者のTRに対する認知度と関心度についてのアンケート」を作成。
	結論内容	1.医療関係者に対し、TRについて「涵意」、「服務範囲」、「医療内容」の三点についての認識を調査した結果、「涵意」についてはその意義、目的ともに深く理解されており、「服務範囲」についても方法や適用対象が非常によく理解されている。また「医療内容」についても一定以上の共有知識があるが、更に高度な治療内容についてはそれほど理解されていない。 2.医療関係者におけるTRの「評価性反応」に関して、TRが患者に対する治療のひとつの選択であると考えてはいるが、国内ではまだ広く普及しておらず、一般の認知度も低いため、今急に医療システムに導入されても、受け入れられる可能性は低いと思われる。それゆえまず国内でTRに関する教育的宣伝をすることに賛成している。また「行動傾向」に関しては、行動傾向の態度はすなわち肯定的な態度だと考えられている。 3.医療関係者個人の個人的な背景（性別、年齢、勤務年数、役職、所属部門）はそれぞれ異なるが、それらはTRに対する認知度には特に影響しない。しかし性別や役職によってTRのとらえ方は大きく異なる。特に女性は「評価性反応」、「行動傾向」双方の態度面において男性より優れている。また役職の差については、治療師のTRについての評価は高く、「評価性反応」は医師や看護師より優れている。しかしTRを医療システムに導入する場合、「行動傾向」上医師は治療師や看護師に比べて明らかに消極的である。

表9：続き

NO. 13 陳惠美、許正典	研究対象	うつ病患者
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」法を採用、実験の過程を状況評価、活動設計、治療前のうつ症状程度の測定、治療進行、治療後のうつ症状程度の測定の五段階に分ける。実験設計によるレジャー行為と態度に関するアンケート、診療記録表、ベック優越量表、活動記録表、レジャー態度などの五種類のアンケートを実施。介入、活動は屋外のレジャー療法、運動療法、芸術活動、園芸活動、室内娯楽活動。
	結論内容	1. 患者が治療を受けたあとは、うつ病症状には顕著な改善が見られた。しかも、うつ症状は毎月改善し続けた。 2. 異なる治療活動に参加した患者に TR に対する自覚効果を調査したところ、運動療法、室内娯楽活動、屋外レジャー療法、園芸活動、芸術活動の順に自覚効果が高かった。 3. TR に参加する前後でレジャー態度の差を分析したところ、患者は各治療に参加したあとは効果の認知、感情反応、行動傾向ともに治療参加前より高い数値を示した。よって TR は患者の積極的なレジャー態度を増進させる。
NO. 25 呉文瑞	研究対象	20歳から40歳までの背中、腰痛患者
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」法を採用、毎週一回一時間の治療を四週間実施し、その内容は①予防と経験の発表②運動とストレッチ③リラクセスと呼吸法④腰痛患者に薦められるレジャー活動。また臨床常用量表（視覚痛量表、腰痛の日常生活への影響量表）を作成。
	結論内容	1. 背中、腰痛患者は四回の治療に参加したあとは痛みをコントロールすることができようになり、痛みそのものも明らかに改善されている。 2. 背中、腰痛患者は治療後、背中、腰痛の日常生活への影響も大幅に減少し、大きな改善が見られる。 3. 治療後の背中、腰痛改善度は、治療前より大幅に上がっている。平均すると物理療法のほうが改善度が高いが、統計分析結果は大きな差は見られなかった。 4. 四週間の治療前後を比較すると、背中、腰痛の日常生活への影響は大きな差があったが、日常生活の改善についてはそれほど大きな差は見られなかった。
NO. 18 黄翠瑛、林士彦	研究対象	末期がん患者
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」法を採用し、芸術、音楽、一般旅行、空間デザインなどのレジャー活動介入から質、量、社会的な脈絡の三点についての資料を収集。
	結論内容	1. TR 療法は、末期がん患者の第一段階（社会期）においては生活レベルの向上に役立つている。 2. TR の活動への参加は、患者の困難な現況から抜け出すプロセスの第一歩となる。行動が不便になり、日常生活への復帰の見込みがないと分かっている状況において、TR は過去の記憶と現在を結びつけ、生きる力を生じさせる。同時に、患者自身が生命の意義を考えたり、今まで自分が生きてきたことを肯定的に捉えたりできるようになる。 3. 入院前にレジャーの理念を持っていた人は、入院後も外へ出て大自然に触れたいという気持ちが非常に大きい。こうした人達は比較的死ぬを自然なこととして受け入れやすく、誌に対する恐れも小さい。よってレジャーの理念をこうした患者に広めることは、予防医学の段階において大いに役立つといえる。
NO. 24 朱維聖	研究対象	65才以上の高齢者
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」法を採用し、科学的補助器具を使用。ダンス機を利用した運動で量的資料を、団体法に焦点を当ててインタビュー形式で質的資料を採集。
	結論内容	1. 量的には、ダンス機を使用したバランス感覚の測定では、50%の人に測量値の上昇が認められ、パーガー平均量表では21.42%の人に効果が認められた。屈伸測定と階段昇降ではそれぞれ28.57%、35.71%の効果が認められた。目を閉じた状態での片足立ちと目を開いた状態での片足立ちでは左右それぞれ35.71、35.71、21.2、21.2%の効果が認められた。 2. TR は高齢者のバランス感覚の向上に大きな効果があった。資料によると、治療に参加した一部の高齢者は治療中にはバランス感覚に大きな向上が見られたものの、治療を終えるとバランス感覚の向上が止まったり、また低下して元に戻ってしまった。 3. 質的分析結果によると、高齢者はTRで補助器具を用いる際には全神経を集中させる必要があるが、後日活動参加を続ける意向は高く、またバランス感覚の向上による認識によって更なる理解が深まり、治療に参加することに楽しみを見出すようになる。 4. 高齢者はバランス感覚の向上以外にも爽快感や楽しさを味わうことができる。
NO. 14 姜義村	研究対象	10-14歳の自閉症の青少年
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」法を採用し、科学的補助器具を使用。
	結論内容	1. TR 治療後は対人関係の大きな向上が認められた。質量の情報では彼らの対人関係への欲求と友人を失った周期について説明されている。 2. 時期に応じた仲間の輪旋的介入の必要性和、自閉症青少年の社交介入を社会階級に入れるよう建議。 3. 自閉症青少年の社交状況は明らかに向上し、寂しさの解消や友好性の向上につながっている。
NO. 15 林春風	研究対象	身体障害を持つ青少年
	研究方法と活動	「実証介入（臨床、観察）」および実験、記録。
	結論内容	1. TR の団体治療参加後、自我効能点数の増加が見られる。治療とレジャー教育に参加後、レジャー感覚点数の増加とグループコントロールの増加が見られる。 2. 治療グループとコントロールグループのそれぞれの自覚効能とレジャー感覚測定点数は、統計上顕著な差が表れた。 3. 自我効能とレジャー感覚は、異なる背景のテーマによっては統計上大きな差は見られなかった。しかし面談の結果、特に役立つ TR の方法は、レジャー教育と日常レジャー活動の記録だった。 4. 身体障害を持つ青少年は治療後、主体的な自我効能の増加が認められた。主体レジャー感覚は TR の介入方法とレジャー教育活動を含む。

*上記の資料はサンプルとなるセラピューティック・レクリエーション関連の研究論文、文献から作成したものである。

*上記資料のNOは、表1に対応している。

といったテーマは、TR が台湾ではまだ新しく、比較的知られていない領域であるため、これを導入する前に一般社会、或いは医学界でどのように受け入れられるか、ということを知る必要がある。そのため介護施設入居者の家族や医療関係者を対象に TR の認知度を探っているのである。一方の「効果、影響」(NO.13、NO.14、NO.15、NO.18、NO.24、NO.25) といったテーマは、TR を臨床の分野に導入した場合の、例えばバランス、社会適応の能力への影響、自我効能 (Self-efficacy)、といった面での効果を探るものである。

2) TR の実践研究の方法

この研究方法は「調査方法 (質問紙調査法、面接法など)」と「実践介入 (臨床、観察)」の2種類に分けられる。

その中でも「調査方法」(NO.8、NO.26) では、研究者がアンケートや表を作成し、資料の分析、探求を行っている。また「実践介入法」(NO.13、NO.14、NO.15、NO.18、NO.24、NO.25) では、構成された活動に団体活動、長期のインタビュー、記録といったものを加えており、計画、分析を通じて参加体験経歴の資料と治療効果を導き出している。

3) TR の実践研究の対象

ここに挙げる対象は、「調査対象」と「臨床介入対象」に分けられる。「調査対象」(NO.8、NO.26) は現在及び将来 TR サービスの対象となりうる対象であり、「臨床介入対象」(NO.13、NO.14、NO.15、NO.18、NO.24、NO.25) は現在実際に実験を受けている人で、うつ病患者、20代から40代までの腰痛患者、末期がん患者、65才以上の高齢者、10～14歳の自閉症の青少年、身体障害を持つ青少年などがいる。研究者は対象者を年齢層や症例によって絞り、介入を行っている。

4) TR 実践研究の介入活動

臨床介入活動で使用する活動補助器具 (ダンス機)、芸術、音楽、運動、ストレッチ運動、リラクセス法、園芸等といった屋内外の活動がある。活動を一種類に限定したものと多種を複合させたものがある。

5) TR の実践研究の結論

①「認知度、関心度、治療参加への意志」をテ

ーマとした研究の結論

- I. 介護施設入居者の家族の収入額によって、TR への関心度に大きな差が生じる (NO.8-曾湘樺, 2002)¹³⁾。
- II. 介護施設入居者の家族の TR に対する認知度が高いほど、治療活動に対して肯定的な考えを持ち、その効果を認めている。なおかつ、認知度が高いほど、治療参加への意向も強くなる (NO.8-曾湘樺, 2002)¹³⁾。
- III. 医療関係者の TR についての認知度 (意義、目的的理解) は非常に高く、サービス範囲に含まれる方法、適用される対象についての理解も十分にある。またその内容についても共有知識、理解ともに十分ではあるが、TR についての更に高度な内容については、その認知度はまだ不十分であるといえる (NO.26-李翊豪, 2005)³⁾。
- IV. 医療関係者の経歴などによって TR への認知度が変わることはないが、性別、職種によって大きな差が認められる。性別では女性の方が男性に比べて関心が高い。また職種では、治療師のほうが医師や看護師に比べて TR への評価が高い。TR が国内 (台湾) の医療システムに導入される場合、医師の参加意向は看護師や治療師に比べて低い (NO.26-李翊豪, 2005)³⁾。

「認知度、関心度、治療参加への意志」をテーマとした上記2篇の論文の結論によると、介護施設入居者の家族や病院関係者の TR への認知度が高いほど、TR を受け入れやすく、あるいは参加意志が高く、また医療関係者も TR に適した対象者、使用方法への理解が深い。

②「効果、影響」をテーマとした研究の結論

- I. うつ病患者に対する TR 治療は、運動療法がもっとも高い自覚効果をもたらした (NO.13-陳惠美, 2003)¹⁴⁾。
- II. 末期がん患者に対する TR 治療は、生活の質を向上させる効果がある。また、活動に参加することが自身の苦しみを乗り越える為の一つのプロセスとなりうる。また同時に自分自身を見つめなおし、生命の意義を見出したり、自分の今までの人生を肯定できたりようになる (NO.19-黄翠瑛, 2004)¹⁵⁾。

- Ⅲ. TR は高齢者のバランス感覚を向上させる効果がある。但し、活動終了後にはそのバランス感覚が持続する場合とまた衰える場合がある (NO.24-朱維聖, 2005)¹⁶⁾。
- Ⅳ. 高齢者にとってはバランス感覚の向上とともに、レジャー体験による爽快感や充実感を得ることができる (NO.24-朱維聖, 2005)¹⁶⁾。
- Ⅴ. 自閉症の青少年は、TR によって外向性を高めることができる。しかし患者が実際に社会に出てこそ、その孤独感の減少や外向性の向上という効果が明らかになる (NO.14-姜義村, 2003)¹⁷⁾。
- Ⅵ. TR にグループで参加すると、その自覚効果がより高まる。背景、症例の違いと自覚効果には、統計上は大きな差は見られない。そしてインタビュー結果や各例の評価から、TR への参加、レジャー教育活動、日常レジャー活動の記録などでの効果が高い (NO.15-林春鳳, 2003)¹⁸⁾。
- Ⅶ. 身体障害を持つ青少年は、TR に参加することによって大きな自覚効果を得ることができる (NO.15-林春鳳, 2003)¹⁸⁾。
- Ⅷ. 背中中の痛みを抱える患者は、TR と物理治療の療法を受けることにより、痛みの日常生活への影響を減らすことができる。 (NO.25-呉文瑞, 2005)⁴⁾。

「効果、影響」をテーマとする以上 6 編の論文の結論によると、治療を受ける対象者は違っても、うつ病の患者には運動が必要であると判明する、末期がん患者は生命の意義を見出すことができる、また高齢者はバランス感覚が向上し、レジャーの楽しみを見出すことができる、自閉症の青少年の孤独感が減少する、身体障害を持つ青少年の自覚効果が得られる、そして背中中の痛みを抱える患者の日常生活の向上、といったように、それぞれ高い効果が認められた。

4. まとめと提案

上述の分析の結果、過去 24 年間 (1983-2007)、台湾における TR の研究はヘルスレジャー、レジャースポーツ産業の急速な発展に伴い、理論研究、実践的な相関研究ともに盛んになり、その貴重な成果も累積されていった。そしてこれは台湾にお

ける TR 研究の価値が認められ、関心が高まったこととも関連する。また様々な学術分野の学者や実務者がこれらの研究に参加し、学術研究の気風を形成し、良好な研究環境が整えられていったこととも大きく関係している。

この論文で、24 年間に及ぶ台湾の TR 研究の動向と実践研究の成果について明らかにしたが、まだ強化してゆくべき部分が多く見られる。台湾の TR 研究が実践研究において更に国際観、国際的視野をもって地域的な経験を構築してゆくとともに、TR が今後専門分野として基礎を確立し、より一層成熟、発展してゆく為に、筆者は以下の 5 点を TR 研究における今後の課題として提案する。

(1) TR 専門人材の育成

TR が専門分野として発展してゆくためには、更に多くの人材をその研究、実務領域に投入する必要がある。現在台湾の TR 専門人材はまだ不足している状態で、その人材育成と専門分野としての質の向上は大学、専門学校のレベルで始めるのが望ましい。

まず学校で TR に関する講義を展開し、それから徐々に学科、学部の創設、最終的には修士、博士課程の創設まで目指したい。

また、現在すでに TR の実務に従事している、或いは同等の学識を有する者 (保健体育、レジャースポーツ、医療関係者、OT、PT など) については、社会人向け研修という形式で更に TR 関連の専門訓練を履修させることで専門人材と認める。

(2) TR 学会の創設

TR 学会を創設し、同領域の研究発展、教育訓練、実務作業、会員同士の交流、国内外の TR 関連機関との連携、協力を推進する。学会の役割は 1) TR 実務と研究の推進、2) 国内外での TR 関連の学会の開催及び参加、3) TR 関連の書籍や雑誌の出版、4) TR の教育、臨床監督などの活動を行い、専門人材の水準を高める、5) 関係機関の委託を受けて TR 関連の活動を主催するなど。

また学会は、TR の専門分野を確立し、国内の人材育成に尽力する他、一般社会に対して TR の普及を促進し、心身に障害を抱え、レジャー活動

に困難を伴う人々を救う機能も備えたい。

(3) TR の資格、検定試験制度の確立

TR の発展のためには、専門教育と訓練の他に資格制度の確立も重要なプロセスとなる。資格、検定はその人材のプロとしての信用を高めるだけでなく、TR 従事者の社会的地位を向上させるものである。

したがって、この資格を制度化、統一化、権威化し、各大学、専門学校のカリキュラム、履修科目を認可し、また資格登録制度、資格認定基準の制定、資格試験制度などを推進していくことが重要である。

(4) TR 学術誌、期刊の発行

TR 学術誌、期刊の発行して関係者の研究成果や実務経験を発表、資料を提供する場を設け、TR の気風を上げ、理論の平衡をはかり、学術研究の発展と交流を促進させる。

(5) TR 研究人員への海外研修、実習観察などの機会の提供

TR の研究者（主として教員、学生）に海外研修や短期研究に参加する機会を提供することで、専門知識の強化、カリキュラムの発展、視野の拡大のほか、実務経験や実践力を高め、理論と実務との融合を目指す。

また、上述の5点は、台湾のTR 専門領域において強化が必要と思われる点であるが、同時にまさに発展時期にある日本のTR 専門領域においても、参考となりうるものである。

註

註1) 筆者が入手した44件の文献中、韓国の Heewon Yang 氏の論文2篇に韓国の文献の引用が若干見られたほか、日本の Murray Hiroko 氏の論文2篇に日本語の文献が、台湾の林旭龍氏と徐玉珠の論文計3篇に若干の日本語、中国語の文献が引用されている。その他37篇の論文（発表者は台湾人とアメリカ人）は主にアメリカの文献を引用している。

註2) TR の博士号を取得した姜義村氏は、TR の翻訳「治療式遊憩」について特に詳しく言及していないが、講義、シンポジウム、講演などの際には「治療式遊憩」を意図的に

用いている。

註3) 理論的研究は理論の紹介や、それについての論述である。実践研究は現場での面接やアンケートなどによる調査、あるいは観察、臨床介入などを行う研究である。

謝辞

本論文の執筆にあたり、台湾体育大学前学長邱金松教授の激励と、懇切丁寧にご指導下さった屏東教育大学の林春鳳准教授に感謝申し上げます。また、本論文の一部は日本レジャー・レクリエーション学会第37回大会において発表しましたが、当日貴重なご意見を下さった鈴木秀雄先生、師岡文男先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 鈴木秀雄、セラピューティック・レクリエーション—障害の軽減・健康の維持を願う人へのレクリエーション—、不昧堂、東京：47-48、2000
- 2) 茅野宏明、セラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と今後の課題—日本レクリエーション学会における論文発表を中心に—、武庫川女子大学紀要35：183-189、1987
- 3) 李翊豪、醫療人員對休閒治療的認知與態度之研究、朝陽科技大學休閒事業管理系碩士論文、未出版：1-57、2005
- 4) 吳文瑞、休閒治療與物理治療對下背痛療效之研究、明道管理學院管理學研究所碩士論文、未出版：1-58、2005
- 5) 林旭龍：休閒遊憩治療（歐聖榮編「休閒遊憩：理論與實務」、前程文化、台北）、384-408、2007
- 6) 林慧珍・吳承典、「休閒運動管理」系所之定位與發展、休閒運動期刊4：127-138、2005
- 7) 姜義村、寓教於樂的治療式遊憩、適應體育運動與健康雜誌 TAPAS 2 (1)：6-9、2004
- 8) 徐玉珠：治療式遊憩在高齡期健康促進教育上的應用探討、美和技術學院學報26 (1)：189-208、2007
- 9) 陳惠美・黃雅鈴、遊憩治療理論與應用之發展、掌握學術新趨勢接軌國際化教育國際學

- 術研討會-觀光組、銘傳大學觀光學院、桃園：155-172、2003
- 10) 謝立文、淺談台灣運動休閒相關系所現況及師資學生數概況、國民體育季刊 145：52-56、2005
- 11) Carla E. S. Tabourne、休閒服務品質與休閒治療 A new service in leisure industry and therapeutic recreation、2004 年國際休閒保健產業研討會報告書、美和技術學院休閒運動保健系、屏東：1-20、2004
- 12) 2007 高齡者休閒治療國際學術研討會研習手冊 2007 International Symposium on Therapeutic Recreation to the Elderly、屏東、美和技術學院休閒運動保健系主辦、2007
- 13) 曾湘樺、國人對休閒治療消費意願之研究、私立中國文化大學觀光事業研究所碩士論文、未出版：54-58、2002
- 14) 陳惠美、遊憩治療對憂鬱症治療效果之研究國科會專題研究計畫、NSC-91-2415-H-130-005：1-6、2003
- 15) 黃翠瑛、休閒治療對癌末病患生活品質影響之研究、2004 年健康休閒暨觀光餐旅產官學
- 研討會論文集、臺南：1-20、2004
- 16) 朱維聖、治療式遊憩介入於老年人平衡力之效益、雲林科技大學休閒運動研究所碩士論文、未出版：121-124、2005
- 17) Chiang, I. T., Effects of a Therapeutic recreation Intervention within a Technology-Based Physical Activity context on the Social Interaction of youth with Autism Spectrum Disorders Disorders Doctoral Dissertatio, Indiana University-Bloomington, 1-26, 2003 (姜義村、以科技器材主導之身體活動的治療式遊憩對自閉症青少年的社交層面的影響、美國印地安納大學博士論文：1-26、2003)
- 18) Chun-Feng Joy Lin, The Effect of Recreational Therapy on Se-Efficacy and Leisure Awareness for Adolescents with Disabilities Doctoral Dissertatio, University of Minnesota, 207-238, 2003 (林春鳳、休閒治療對青少年自我效能及休閒認知之研究、美國明尼蘇達大學休閒研究所博士論文：207-238、2003)

(受付：2008 年 4 月 21 日)
 (受理：2008 年 9 月 24 日)